

論 文

和太鼓演奏における合わせる体験について

清 源 友香奈

I 問題と目的

和太鼓演奏には大太鼓を用いたソロの演目も存在するが、宮太鼓や絞太鼓を数台用いた合奏の形態が一般的である。和太鼓は、音を出すまでの技術の習得が困難でと言われる打楽器を用いた合奏のセッションが可能であることから、音楽療法や障害児教育、小中学校での集団活動にも取り入れられるようになってきた。しかし、レクリエーション活動の一つという位置づけに留まっているとも言える。集団活動は幅広く、スポーツであるか、演奏であるかでも体験は異なると考えられる。

集団における和太鼓演奏の効果としては、“仲間意識の芽生え”（大久保、2004）や、“集団全体の凝集性に高まりが見られ”ること（吉積、2008）が報告されているが、演奏の過程を通してどのような体験がされていたのかについてはあまり検討されていない。また、松井（1980）が、音楽の治療道具としての特性の中で“集団音楽活動では社会性が要求される”と記していることを考えると、仲間意識の芽生えや集団凝集性の高まりが、和太鼓を集団で用いた演奏によってもたらされた効果なのか、集団音楽活動であれば社会性が高くなることに付随して生じる効果なのかは定かではない。

和太鼓は、片方の面を叩いたとき、表裏の皮が胴中の空気とともに振動する連成振動によって、振動波形に唸りを生じる（OBATA、

1935）。つまり、和太鼓の片方の面を叩くと、胴中の空気が振動することで、もう一方の面も振動し、その振動によって更に胴中の空気が振動するため、片面のみの振動では生じない唸りが生じるのである。唸りとは、音の高さがわずかに異なる二つの音が鳴っているとき、各々の基音の周波数の差に相当する周期で音の強弱が聞こえる現象であり、唸りが生じることから、片面のみの振動に比べて、和太鼓の振動は減衰する速度が遅くなり、持続時間が長くなる。この現象は、面が両面あることによるのみ生じているわけではなく、和太鼓の中でも、胴に樗を用いたものと、胴にアルミニウムを用いたものでは異なることも示されている。西尾ら（1990）によると、胴が樗のものは、胴がアルミニウムのものに比べて、振動波形が連成振動によって振幅変調を伴うことから、減衰速度が遅く持続時間が長いという。従って、胴に樗を用いた和太鼓の音は、他の楽器の音に比べ、振動が独特であると言える。また、和太鼓は音階の無い打楽器であることからリズムを主として演奏を行う。リズムは音楽的要素の中で最も原始的次元に作用する要素であると言われている（松井、1980）。独特な振動を持った和太鼓の音を用いたリズム演奏においては、演奏の中でも、他の楽器の演奏とは異なった体験がもたらされることが考えられる。和太鼓の音が独特な振動を持つことや、原始的次元に作用すると言われるリズムの演奏であることを考えると、和太鼓を

団で用いた演奏においては、仲間意識の芽生えや、集団凝集性の高まりの他にも体験されているものがあると考えられる。また、仲間意識の芽生えや、集団凝集性の高まりといった効果についても、どのような体験によって生じたものであるのかを検討することによって、現時点で見落とされている和太鼓演奏における体験の可能性に光が当てられるかもしれない。本研究では、和太鼓演奏における体験のうち、合わせる体験に焦点を当て、心理臨床学的視点から調査、考察する。

II 方法

和太鼓演奏熟練者を対象に半構造化面接によるインタビュー調査を行い、合わせる体験に関する語りに焦点を当て、語られた内容を質的に分析した。用いた分析法は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチである（以下、M-GTA 分析と記す）。グラウンデッド・セオリー・アプローチは、社会学者のグレイザー（Barney Glaser）とシュトラウス（Anselm Strauss）によって提唱された、質的な社会調査の手法である。語りという質的な対象を、理論構築に繋げようと試みた研究方法であることから選んだ。本研究で用いている修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチは、木下（2003）によって修正が加えられたものである。分析手順については整理方法に記す。

1. 調査協力者

◆ 和太鼓演奏熟練者

プロの和太鼓演奏グループの現役プレイヤー。男性 16 名（22 歳～58 歳、平均年齢 33.8 歳）、女性 7 名（23 歳～56 歳、平均年齢 35.3 歳）、計 23 名。

補足 本調査の協力者は、世界で活躍するプロ

の和太鼓演奏家の団体である。日本を代表する和太鼓演奏家の団体の中でも、特に、歴史を通して育まれてきた和太鼓の在り方を大切に守り、保持している団体であると感じられることから調査を依頼した。

2. 調査内容と手続き

- ① 半構造化面接を実施した。1 対 1 の個別面接で 1 人につき 1 回行った。本人の了承がある場合は録音した。録音を許可してくれたのは 23 名中 22 名である。インタビュー内容は「和太鼓について、叩いていて感じることで良いですし、太鼓自体についてでも良いですし、思うことや感じることを何でも教えてください」と問いかけ、被験者の話す内容に沿いながら聞いていった。所要時間は 1 回につき約 30 分とした。筆者が佐渡島まで行き、4 日間に渡って実施した。
- ② 録音を許可されたものは逐語録を作成した。録音の許可が得られなかったものについては、許可を得た上でメモを取った。

3. 整理方法

インタビュー内容は、M-GTA 分析により分析した。分析手順を以下に示す。

- ① データの関連箇所に着目し、それを 1 つの具体例（バリエーション）とし、且つ、他の類似具体例をも説明できると考えられる説明概念を生成する。
- ② 概念を創る際に、分析ワークシートを作成し、概念名、定義、最初の具体例などを記入する。
- ③ データ分析を進める中で、新たな概念を生成し、分析ワークシートは個々の概念ごとに作成する。
- ④ 同時並行で、他の具体例をデータから探し、

ワークシートのバリエーション欄に追加記入していく。具体例が豊富に出てこなければ、その概念は有効でないと判断する。

- ⑤ 生成した概念は、類似例と対極例からの比較により解釈の偏りを防ぎ、結果をワークシートの理論的メモ欄に記入する。
- ⑥ 生成した概念と他の概念との関係を個々の概念ごとに検討し、関係図にしていく。
- ⑦ 複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成し、カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめる。

Ⅲ 結果

1. カテゴリー、概念、定義、バリエーション（語られた具体例）、結果図

上記⑤までの分析の結果、生成された概念は11である。11の概念は、上記⑥⑦の分析から、さらに3つのカテゴリーに分類された。カテゴリーと、各カテゴリーに分類された概念、定義、バリエーション（語られた具体例）について表1. に示す。バリエーションとは、概念生成のもととなった実際の語りである。生成された概念の根拠を示すためと、体験されていることをより深く理解出来るようにするために示している。

2. 結果の全体像

和太鼓演奏において、合わせる体験が為されているとき、同じ曲目ないし同じリズムを一緒に演奏するということが起こっている。そこでは、同じ目的のもと、一緒に「何か」を行うことの体験が為されている。「太鼓を叩いてて楽しいなと思うのはね、皆で一緒に何かやるとかね」という語りからは、「一緒に同じことをする楽しさ」が感じられており、一緒に行う「何か」が偶然和太鼓演奏であったという位置づけであ

ることが伺える。また、一緒に同じことを行うと、同じことを行っている間は、行為の遂行における自分の役割が与えられる。和太鼓演奏では、演奏を通して自分の役割が与えられることによって、集団を構成する一員としての《居場所の獲得》がされる。和太鼓演奏という同じことを一緒に行うことを通して、仲間であるという感覚も体験される（《仲間意識の芽生え》）。「太鼓っていう、一つ好きなもので繋がっている感じ」と語られるように、和太鼓演奏は、共通する「好きなもの」という位置付けであり、「好きなもの」を同じくすることから「一つ好きなもので繋がっている」と感じられている。さらに、和太鼓演奏では、一緒に同じ曲を演奏することを通して、演奏を成立させるために自分がどう在るべきかということが意識され、《集団の一員としての自分の意識》が生じる。これらは、和太鼓演奏において体験されていることであるが、ここで体験されている和太鼓演奏は、一緒に行う「何か」であり、「居場所」となる役割を与えてくれるものであり、共通する「好きなもの」であり、一員としての自分の意識をもたらす集団活動である。同じ目的のもと、現実的な関わりを持って行われる集団活動であれば、和太鼓演奏でなくても共通して体験されるものであることから、【集団活動の体験】とカテゴリー化した。

現実的な関わりにおける体験の他に、内的な関わりの体験もされている。和太鼓演奏では、実際の音を合わせるために、気持ちを合わせるということが意識されている（《気持ちを合わせる意識》）。「気持ちがバラバラだと何十回やっても合わないし。だから気持ちを合わせて」「気持ちが繋がると音も合ってくる」と語られており、音を合わせるために、物理的な振動である音ではなく、客観的には捉えにくい「気持ち」を意識し、合わせるということが行われる。ま

表1. 和太鼓演奏における合わせる体験：4つのカテゴリと11の概念

カテゴリー	概念	定義	バリエーション
集団活動の体験	一緒に同じことをする楽しさ	他者と一緒に同じことをするということが自らの楽しさが体験されているということ。	・太鼓を叩いて楽しいと思うのはね、皆で一緒になんかやるとかね。 ・みんなでするのが楽しいんだよね。
	居場所の獲得	演奏を通して自分の役割が与えられることによって、自分の居場所を獲得することが出来るということ。	・皆で太鼓で何かをすることで、自分の居場所を獲得したり。 ・自分がここに居る感。俺もここに居るし、お前も居るよねみたいな。
	仲間意識の芽生え	和太鼓演奏を通して、同じことを一緒にしている仲間という感覚が体験されるということ	・太鼓っていう、一つ好きなもので繋がっている感じ。
	集団の一員としての自分の意識	集団の中の個人としての自分の在り方が意識されるということ。	・太鼓をやってきたことで、上手くいかないところが見つかったら、どうすればいいんだろうとか考えるようになったのかも知れない。 ・あなたがいて私がいて、私がいてあなたがいて、みたいなことを一生懸命やって、一つの曲が出来る。
息を合わせる体験	気持ちを合わせる意識	演奏において音を合わせるために、気持ちを合わせるということが意識されるということ。	・息を合わせることが大事。 ・気持ちがバラバラだと何十回やっても合わないし。だから気持ちを合わせてって。 ・信頼関係がないとダメで。 ・気持ちが繋がると音も合ってくる。 ・本番までに同じ気持ちで立てるように。
	察する・場を読む体験	実際に気持ちを合わせるために、相手の気持ちを察し、場を読むということ。	・関係が上手くできていないと、その曲はうまくできない。気持ちの繋がりがだったり。顔を見合せなくとも、気持ちが合うように。 ・その場の流れてるうねりに乗るとか、そういう感覚も何となく分かってくるんですよ。
	関係性が強まる体験	和太鼓演奏における合わせる体験を通して、一緒に演奏した人と仲良くなれる感じが体験されるということ。	・別にその、太鼓好きだから、趣味が合うからって言うんじゃないで、こう、叩いた後に、昔から付き合ってたみたいな気持ちに慣れるんだよね。 ・太鼓叩いていくうちに、ほんとに十年付き合ってるっていう感じになるの。絶対にこの五日間初めて会って友達になった人じゃないくらいだね、心と心のコネクションが強くなってるっていう体験をするのね。 ・一つの音を作り上げて、どんって一つの音を出すと、あ、私たち仲間みたいな感じが。
	お互いが解った気になれるという体験	演奏を通して、どのような人か、またどのような体験をしているかが、お互いに分かるように感じるということ。	・なんか、お互い分かったような気になれる。 ・和太鼓は、叩いたら正直に出るから。みんな早く相手のことが分かる楽器なのかもです。ここに何十人かが集まりました、さあお喋りしてください、初めましてって話し始めるよりも、どんどんどんって太鼓を皆で一緒に叩いたら何となくみんなお互いのお互いを分かって、仲良くなりやすいかも。 ・一緒に太鼓を叩くっていうときに、何か共感できる感じ。 ・共感できる。言葉であんまり表現見つかからないけど、太鼓叩くことで、みんなやると、同じ感じっていうか、同じ感動。
	一体感の体験	合わせようという意図を超えて、音や気持ちや息が合う体験がもたらされることによって、演奏者に一体感が体験されるということ。	・みんなやっていると、一つになれた感が感じられる。 ・もっともっと重なり合って、結果それがみんなの音になって、一つになって。 ・浮遊感っていうか。ほんとにウオって揃ったときって、真空状態になるような。それがやっぱすごい気持ち良かったり。 ・みんなの魂。一つ一つの魂が、大きな一つになったみたいな感じ。
息の合う体験	自分が無くなる感覚の体験	音や気持ちや息がぴったり合うことからもたらされる一体感によって、自分が無くなる感覚が体験されるということ。	・すごい合ったときって、自分の音が分からなくなるっていうか。なんか自分が打ってる感覚が無くなる。自分が無くなる。その不安な感じもある。
	抽象的な存在の体験	意図を超えて合う体験がもたらされるときに、エネルギーといった抽象的なものが体験されているということ。	・演奏がぴったり合ってる時は、この辺（頭上前方）で音が聞こえるんです。実際に聞こえる音と、この辺で合ってる音。ズレるとここには聞こえないので、不思議な感じがありますね。 ・すごい人のエネルギーが一つになったときにパーってなるんだなって思うんですけど。一人ひとりの持つてるそのエネルギーを一つにするものっていうか、みんなのそのエネルギーが一つに集まったときに、なんかこう人間業じゃないものを感じれるっていうか。

た、気持ちを合わせるために、一緒に演奏をしているメンバーの気持ちを察することや、一緒に演奏をしているメンバーが集まることで生み出される「場」を感じ、その場に「乗る」ということが体験されている（《察する・場を読む体験》）。このような、気持ちを合わせようとする体験を経ることで、《関係性が強まる体験》がもたらされる。「別にその、太鼓好きだから、趣味が合うからって言うんじゃないくて、こう、叩いた後に、昔から付き合ってたみたいな気持ちになれるんだよね」という語りからも、ここでは、同じことを一緒にすることによってもたらされる仲間意識とは異なり、個人と個人の間の繋がりとしての関係性が強まっていることが伺える。音を合わせるために気持ちを意識し、意識した気持ちを更に合わせようという体験を重ねることで演奏が行われる。演奏におけるこの体験を経ることで、演奏者は、一緒に演奏している人がどのような人か、またどのような体験をしているかを感じ、《お互いが分かった気になれるという体験》をすることになる。一緒に演奏している人がどのような人であるかについては、「叩いたら正直に出るから、どんな人か分かる」と語られている。和太鼓の音は、その人自身を反映しやすい音であると感じられており、その音をお互いに出す、お互いに聞くことで、「共感できる。言葉であんまり表現見つかからないけど、太鼓叩くことで、みんなでやると、同じ感じっていうか、同じ感動みたいな」と、分かり合えたような感覚が生じている。これらは、いずれも「息を合わせる」という言葉とともに語られたものである。音を合わせるために「息を合わせる」ことが意識されていることが語られ、「息を合わせる」とことは「気持ち」を合わせることであり、「気持ち」を合わせるために、メンバーの気持ちを察し、「場」を読むことが為され、演奏におけるそれらの体験を

経て、個人と個人の間の繋がりとしての関係性が強まり、一緒に演奏している人がどのような人か、どのような体験をしているかが分かることから、これらを【息を合わせる体験】とカテゴリー化した。

音を合わせるために、息を合わせるということが意図して行われているが、和太鼓演奏では、息を合わせようという意図している体験のみでなく、意図を超えて息が合うという体験も為されている。合わせようという意図を超えて音が合うことによって、演奏者には《一体感の体験》がもたらされる。ここで体験されている一体感とは、同じことを一緒にすることによってもたらされる仲間意識や、気持ちを合わせることにによって生じる個人間の繋がりとしての関係性の強まりとは異なり、「みんなの魂。一つ一つの魂が、大きな一つになったみたいな感じ」と語られるように、個人としての枠が無くなった上での一体感である。個人としての枠が無くなった上での一体感の体験は、個の埋没する感覚をもたらし、《自分が無くなる感覚の体験》にも繋がる。また、意図を超えて息が合うとき、演奏者は、個人個人の音を合わせた以上のものが存在するような感覚を体験している。「本当にぴったり合った時は、グーっと前に行くようなものがあるみたいに感じる」「みんなのそのエネルギーが一つに集まったときに、なんかこう人間業じゃないものを感じれる」と語られており、《抽象的な存在の体験》がもたらされている。また、《一体感の体験》のバリエーションにおける「魂」という語りも、抽象的な存在の体験の一つでもあると考えられる。これらは、内的な関わりの体験であるが、息を合わせる体験が、個人が意図する過程で体験されるものであるのに対し、息が合う体験は、息を合わせようと意図した結果生じる事態における体験である。これらを【息が合う体験】とカテゴリー化した。

3. 結果図

結果図とは、生成されたカテゴリーや概念の関係を図として示したものである。

以下に、M-GTA 分析の結果図を示す（図 1）。

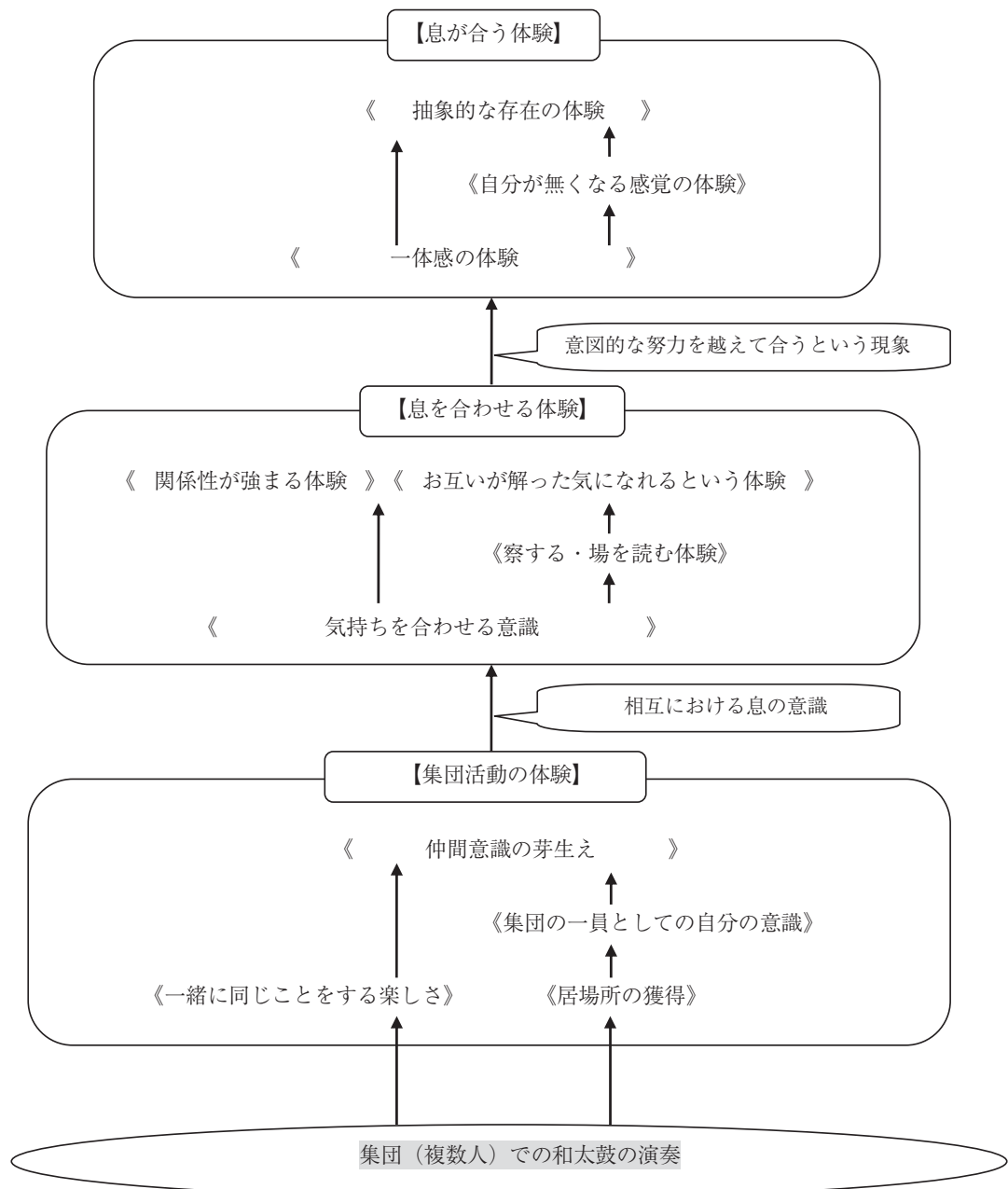


図 1. M-GTA 結果図

IV 考察

本研究の結果から、和太鼓演奏における合わせる体験においては、異なる三通りの体験が為されていることが示唆された。以下に、カテゴリーごとの体験を考察する。また、各カテゴリーの体験から考察された図を、M-GTAの結果図とは別に示している。

1. 集団活動の体験

① 居場所としての活動

【集団活動の体験】で意識されているのは、一緒に行う行為としての和太鼓演奏や、集団を構成する一員としての自分であり、いずれも代替可能なものであると考えられる。ここでは、現実的行為を中心とした関わりが体験されており、内的なものはあまり意識されていない。

人は関わりを求める生き物であると言われていた（Maslow, 1970）。しかし、関わりには質の違いがある。個々での会話のような関わりを持たなくても、一緒に行う活動があることは、そこに一緒に居るということを可能にする。作業療法では、作業を通して機能を回復すること等を目的としているが、世界作業療法士連盟（WFOT, 2004）は“作業療法は、作業を通して健康と安寧を促進することに関心をもつ専門職である”と記しており、“安寧”とは“well being”であるとしている。ここで言われる作業は、“時を共有する”ことや“場所を共有する”ことも含まれており、居られる場所が重要視されていることが伺える。関わりを持つのが困難な老年期の方に対しても、個々の関わりを持たなくても、参加することでそこに居ることを可能にする集団活動の特徴は重要視されており、《居場所の獲得》は、個々の関わりを持つのが困難な人に対して、非常に大きな意義を持つと言えよう。また、参加しているうちに関わりが

生じ、初めは居場所であった自分の役割に対して責任感を持つことを通じて社会性が育まれることも、多くの集団活動に共通して言われている点であると考えられる。

② 現実的な枠組みとしての集団

「太鼓っていう、一つ好きなもので繋がっている感じ」という語りから、ここでの仲間意識は、個々での関わりを通して育まれたものとは質が異なることが伺える。人は自分の所属している集団（内集団）に対し、高い評価を与え好意的な態度や行動をとる傾向がある（Brewer, 1979）と言われており、「一つ好きなもので繋がっている」という感覚は、実際の関わりから生じた個々の繋がり感覚というよりは、集団という現実的な枠組みが存在することによって生じる所属意識に近い仲間意識であると考えられる。

以下に【集団活動の体験】における考察から導き出された図を示す（図2）。図の円は演奏者を表している。集団活動によって与えられる同じ目的の存在から、個々の関わりが無くても、その場に居ることが可能になる。また、集団活動という現実的な枠組みによって、参加者は同じ集団として体験される。

2. 息を合わせる体験

【集団活動の体験】が現実的行為を介した関わりであるのに対し、ここでは内的なものが意識され、体験されている。また【息を合わせる体験】では、音を合わせるために、音ではなく、息が意識されていると語られている。ここでは、自分も他者も、集団を構成する代替可能な一員ではなく、息をする生きた個人として、また気持ちを持った個人と捉えられている。

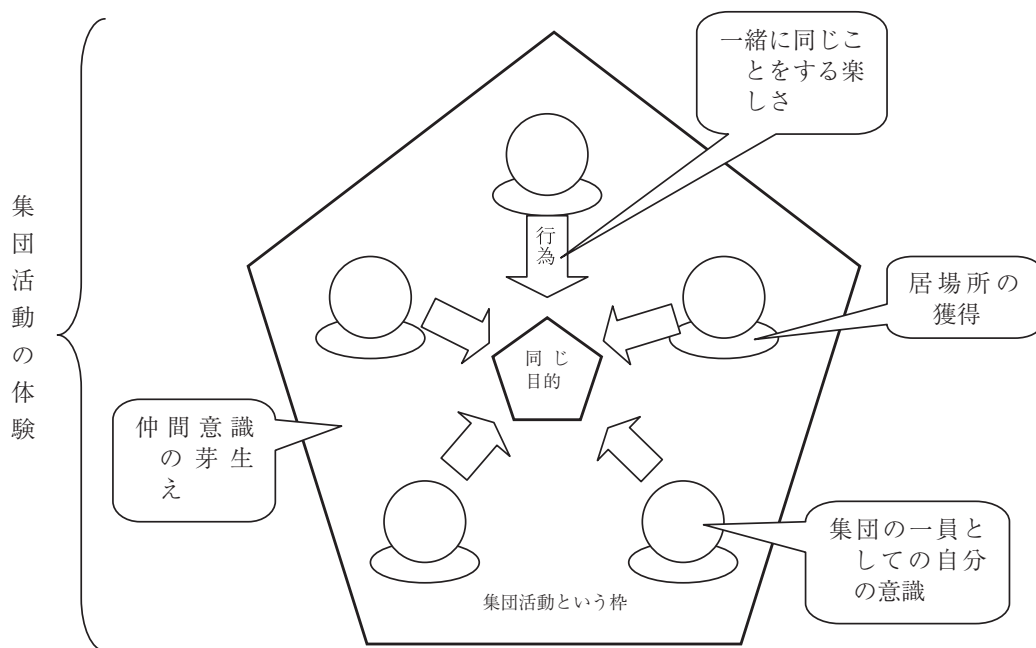


図2. 集団活動の体験

① 内的な関わり

《関係性が強まる体験》《お互いが解った気になれる体験》からは、グループ箱庭やファンタジーグループにおける、普段の関わりより深いところでの関わりに近いものが想起される。グループ箱庭は順にアイテムを置いてゆき(岡田、1993)、ファンタジーグループでは同時に絵を描くこともある(樋口、2000)。和太鼓演奏では、決まった曲目の演奏という枠組みの中で音を出す。これらは関わる行為の構造も異なり、体験を比べることは相当困難であるためここでは避けるが、個人を反映したものを相互に体験するということが存在するという点で、重なるところはあるように考えられる。和太鼓の音は、自分の感情が「叩いたら正直に出る」と感じられており、他者の出した音を聞く体験、自分の出した音を聞かれる体験に加えて、生きた個人が集まることで生じるその場を感じることで、現実的な集団という枠組みとは異なった、内的な交流を伴った関係性が体験されている。和太鼓

の音に表象されるものと、箱庭のフィギュアに表象されるイメージやフィンガーペインティングのニカワのついた絵の具や創作活動の粘土に表象されるイメージが同じであるということは決して言えないが、現実的行為を介した関わりでは体験されない内的なものを相互に感じるという体験が存在していることが伺える。

② 息を合わせ合う

息については、「息を合わせるイコール気持ちを合わせる」と語られ、また「一緒に演奏する人が、どんな気持ちなのか、体調はどうなのかとか、そういうことも含めて同じ気持ちで立てるように」と、個人の気持ちや身体を反映したものとして感じられていることが伺える。息を合わせることにについて、齋藤(2003)は、“息に限らず、身体全体にあふれている「相手の存在のリズム」を、自分の身体のそれに合わせ、そのリズムを感じ取るという仕方です大事にするということが「息を合わせる」ということであ

る”と述べていることから、息は、気持ちや身体も含んだ存在を反映するものとして体験されていると考えられる。

また、齋藤（2003）は、“「息が合う」ということは、互いに「息を合わせ合う」ことを通して得られる”ものであると述べ、“各人の外側のある基本的なテンポにそれぞれが独立して合わせた結果”ではなく“各人が互いの身体に息づくリズムを感じ取り合い、瞬間瞬間にリズムを生み出し続ける”ものであると記している。和太鼓演奏は、指揮者が居ないという形態で行われることから、構造としても合わせ合うということが体験されやすいと考えられる。合わせ合う際にも、特定の他者に合わせるのではなく、生きた個人が集まることで生じる、場が意識されている。

和太鼓演奏においては、身体も含んだ存在のリズムを相互に意識し、そのリズムを感じ、合わせ合うということが体験されていると言えよう。

【息を合わせる体験】における考察から導き出された図を以下に示す（図3）。現実的な枠組みの意識だけでなく、気持ちや身体をも反映したものである他者の息を感じ取り、息を介して内的な関わりを体験している。また、生きた個人が集まることで生じる場を感じ取るということが体験されている。

3. 息が合う体験

齋藤（2003）は、「息を合わせる」ことが“技術”であるとする、「息が合う」のは“事態”であると述べている。【息を合わせる体験】において、互いの息を感じ、それを合わせようとする意識・意図が体験されているのに対し、【息が合う体験】では、意図を超えて息が合う感覚が体験されている。古浦（1990）は、「息が合う」という現象は“演奏者がお互いに呼吸を合致させようと意図的に努力しているからではなく、おのずから生起する現象ではないか”と述

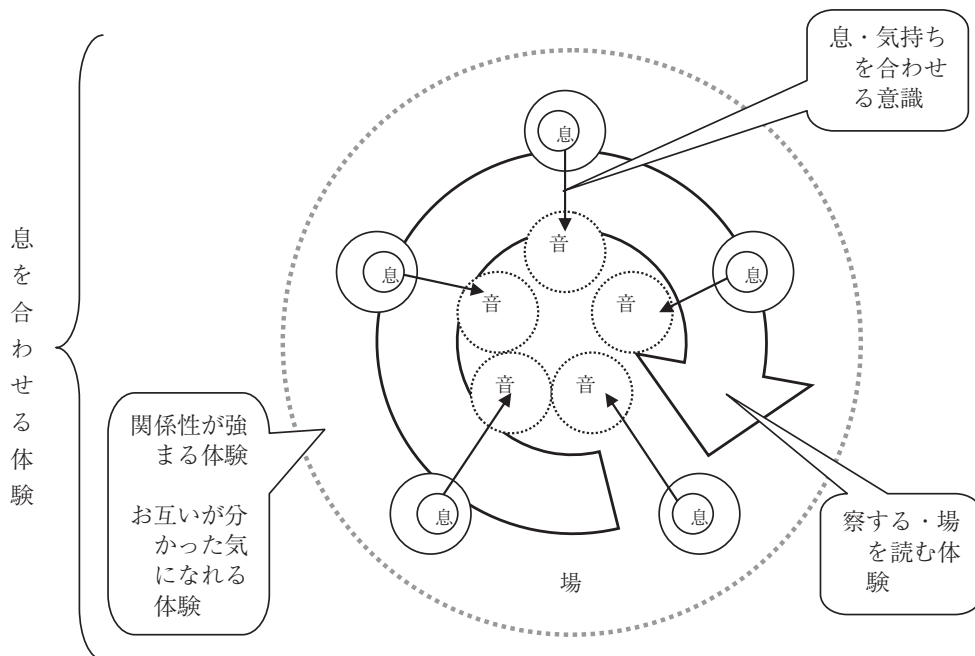


図3. 息を合わせる体験

べている。本論文で【息が合う体験】とカテゴリー化したものは、意図的に努力する段階を越えて、ぴったりと息が合うという事態での体験を意味している。

【息が合う体験】からは、一体感が体験され、自分が無くなる感覚がもたらされている。自他も集団も一体と感じられ、自分や他人は、集団を構成する一員でも、気持ちを持った個人でもなく、「魂」のような存在として感じられ、それが一体となることで「エネルギー」のような抽象的なものが生じるとも体験されている。

① 抽象的な存在の体験

息は、生きている主体と密接に繋がったものである一方で、多くの生きるものにも共通するものである。存在的要素は現実的行為以上に帯びていると考えられる。息そのものの要素を強く帯びると、主体は、現実的な役割を担う一員としての意識や、気持ちを持った個人よりも、存在の感覚を強く体験するのかも知れない。【息が合う体験】において、自分や他者が「魂」という言葉で語られていることから、一員や個人の意識より、存在としての感覚が強く体験されていると考えられる。【息を合わせる体験】において、個人の気持ちを反映するものとして感じられていた息であるが、【息が合う体験】においては、存在を反映するものとして体験されていると考えられる。

② 一体感・自分が無くなる感覚

齋藤 (2003) は、「息が合う」という現象は“他者と自己とを判然と区別できない「あいだ」を生きることである”と述べている。一体感は、“他者と自己とを判然と区別できない”事態によって生じるものと考えられる。また、《自分が無くなる感覚の体験》は、「一つ一つの魂が、大きな一つになったような感じ」という語りか

らも、存在としての自分がそこに在る感覚が何え、自分の存在自体が無になってしまう感覚ではなく、自分という枠が、つまりは自他の境界が曖昧になる体験であると考えられる。

【息が合う体験】の考察から導き出された図を以下に示す (図4)。

V 総合考察

和太鼓演奏における合わせる体験には、質の違いがあるようである。

一般的に、集団活動がもたらす効果と言われるものは、現実的行為を介した関わりを通じたものであることから、【集団活動の体験】に関連したものであると考えられる。【集団活動の体験】では、演奏者は個々の関わり無しに居ることが可能になる。集団活動という現実的な枠組みの中で、所属意識も体験されることから、個々の関わりを持つことに困難さを抱える人にとって、大きな意味を持ち得ると考えられる。また、居ることが関わりを生み、現実的な行為を通して役割を担う体験から社会性が育まれることも期待される。

【集団活動の体験】の他に、本研究では、息というものが体験されていることが示唆された。息は、現実存在するものでありながら、視覚的には捉えられず、触れることも出来ない。現実的行為が多くの人にとって同じ事実として受け取れるだけの確実性があるのに対し、息は、それを介してどのようなやり取りが為されたのか捉えるのは困難である。息の体験は、和太鼓演奏のみにおいて為されるものではないが、捉えるのが困難な息を強く意識した体験が為されているというのは和太鼓演奏の特徴の一つであると言えよう。息の体験には、さらに【息を合わせる体験】と【息が合う体験】があることも示唆された。

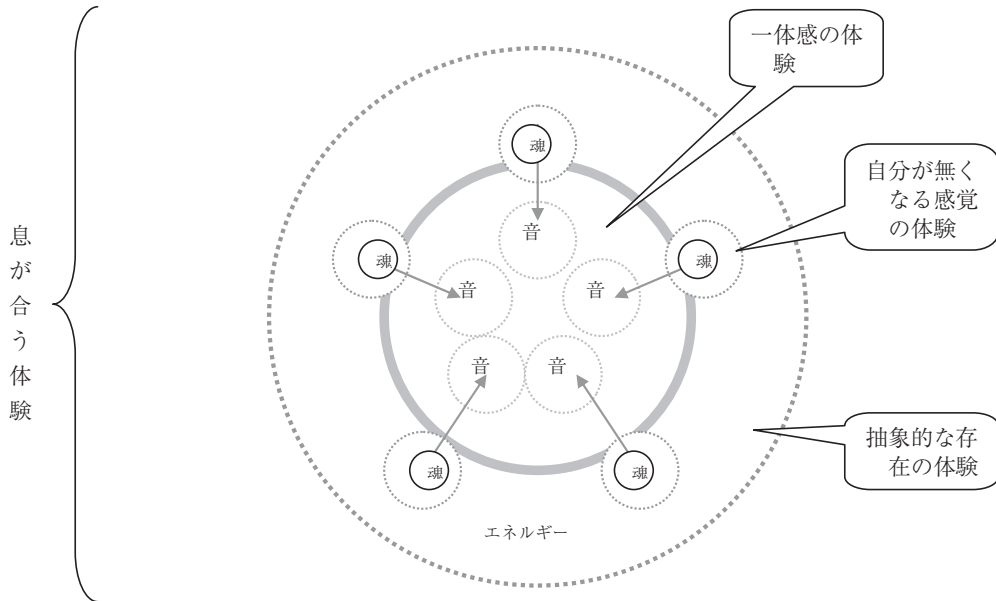


図4. 息が合う体験

【息を合わせる体験】では、現実的な行為を介した関わりとは異なり、内的なものを相互に感じるという関わりが体験されていた。言語を用いて自身の内的体験を伝え合うわけではないが、現実的な行為を介した関わりよりも内的に深い関わりが体験されることから、現実的な集団という枠組みによって体験される仲間意識とは質の異なった、内的な交流を伴った関係性が体験されている。また、内的な交流は、息を合わせるという意識のもとに行われており、個人の気持ちや身体の調子も含んだ存在のリズムを反映するものとしての息を感じ、相互に合わせ合う体験がされていた。合わせ合う体験では、他者の息のみではなく、生きた個人が集まることで生じる場も感じられていた。

【息が合う体験】では、意図を超えて息が合う現象が体験されていた。意図を越えて息が合うと、息を合わせようと意図していたときは気持ちや身体の調子も含んだ存在のリズムを反映するものとして感じられていた息が、存在そのものの要素を強め、一員や個人ではなく魂と

いった抽象的な存在として体験されていた。また、自他の境界が曖昧になるという意味での一体感が体験されていた。

木村（1988）は、合奏を“各自が楽譜に指定されている音符や休止符をメトロノーム通りの正確さで再現”する段階と、“各演奏者が互いに共演者の演奏に合わせようとする”段階、そして“各自がいわば自分勝手な演奏を行って、しかもその結果としてごく自然にまとまった合奏が成立”する段階の三通りに分けている。“各自が楽譜に指定されている音符や休止符をメトロノーム通りの正確さで再現”する段階とは、本論文では、【集団活動の体験】に相当すると考えられ、“楽譜に指定されている音符や休止符”は、“外側のある基本的なテンポ”（齋藤、2003）であり、図2における同じ目的であると言える。次の“各演奏者が互いに共演者の演奏に合わせようとする”段階は、【息を合わせる体験】に相当すると考えられ、【息が合う体験】は、“各自がいわば自分勝手な演奏を行って、しかもその結果としてごく自然にまとまった合

奏が成立”する段階に相当すると考えられる。

木村（1988）は、最後の段階では、音楽は“各演奏者の「あいだ」”で成立していると述べている。この“「あいだ」”とは、明瞭な自己帰属感を伴うものであり、“各自の内部に見出されながら各自のあいだにも見出される”と記されている。【息が合う体験】が為されているとき、演奏者は「自分の音が分からなくなる」という体験をしており、それは「自分の音」が存在していることは感じていながら、自他の境界が分からないという、自分でもあり他者でもあるところの体験であると考えられる。「演奏がぴったり合ってる時は、この辺（頭上前方）で音が聞こえるんです。実際に聞こえる音と、この辺で合ってる音」という語りからは、個人が出している音の他に、演奏がぴったり合うことで生じる音が存在することが伺える。息を合わそうとしている段階では存在しない音であることから、ぴったりと合った息に関連するものではないかと考えられる。この、自分でもあり他者でもあり、集団でもあると同時に、自分という個人のものではなく、他者という個人のものでもなく、集団だけのものでもない「合ってる音」が、物理的に存在する音とも異なり、息を反映したものとして感じられる“「あいだ」”が、「エネルギー」のような抽象的なものとして語られているとも考えられる。【息が合う体験】における《一体感の体験》は、この“「あいだ」”の体験であるのではないだろうか。物理的に存在する音の一致ではなく、息が合う現象として語られていることから、個人の気持ちや身体を反映し得ると同時に、自身の存在の要素を強く帯びたものが合う体験であったことが伺える。また「一体」と語られることから、自分でもあり他者でもある体験であったことが伺える一方で、「実際に合ってる音」と別に存在するものが語られることから、自分のみではなく他者

のみでもない体験であったことが伺える。

ところで、《一体感の体験》から《自分が無くなる感覚の体験》をした演奏者は、「不安な感じもある。だからわざとずらしてみたり」と語っており、自他の境界が曖昧になったことで、再度個人としての自分を確認し直すということを試みていた。岡田（1993）は、箱庭の砂が触媒的な働きをすることから、“フュージョンを起こしやすくし、かつ結晶させやすくしているのではないか”と述べており、また木村（2001）は、“無名の個人を越えた広がり”が“現実になるためには、具体的な人を必要とする”と述べている。《自分が無くなる感覚の体験》は、必ずしもそのまま個が溶けてしまう方向に進むのではなく、《自分が無くなる感覚の体験》を経たからこそ感じられる、個人としての意識が体験されるとも考えられる。三つの質の異なる体験は、各体験において完結したものではなく、いずれかの体験が生じることで、他の体験ももたらされるように繋がっているのかもしれない。

和太鼓演奏における合わせる体験には、現実的行為を介した関わりの体験と、息の体験があり、息の体験はさらに、個人の意識を帯びた息の体験と、個人の意識を超えた息の体験があるようであることが示唆された。大きく三つに分けられた質の異なる体験のどれかではなく、いずれの体験も生じ得ることが、和太鼓演奏における合わせる体験の特徴の一つであると考えられる。幅の広い体験が為されていることから、どの体験を活かすかによって臨床の有用性が期待される対象者も異なってくると考えられ、可能性とともに慎重を期する必要があると考えられる。

今後の課題

本研究は、和太鼓演奏における合わせる体験

の全体像をつかむべく、体験を事例検討的に深めていく一歩前の段階として行った。和太鼓演奏においては、現実的行為を介した関わりの他に、息を介した他者との関わりが体験されていることが示唆されたが、そこで個人が息や音を他者との間でどのように体験しているのかの検討は出来ていない。今後は、各体験、特に息を介した他者との関わりや一体感の体験に焦点を当て、より個人の体験を汲み上げる形で検討していきたい。また、個人の体験の検討を通して、三つの質の異なる体験がどのように繋がっているのかについても検討してゆければと思う。

〈付記〉本研究に当たり、貴重な時間を割いてインタビュー調査に協力してくださった鼓童のメンバーの方々に心から感謝申し上げます。また、日頃から親身にご指導いただいている秋田巖先生に、深く御礼申し上げます。

参考文献

- Brewer, M.B.: "Ingroup Bias in the Minimal Intergroup Situation: A Cognitive-motivational Analysis." *Psychological Bulletin*, 86, 307-324
- 樋口和彦・岡田康伸 (編): ファンタジーグループ入門 創元社, 2000
- 池田由子: 集団精神療法の理論と実際第2版 医学書院, 1973
- 岩田慶治: 木が人になり、人が木になる アニミズムと今日 人文書館, 2005
- 皆藤章: 生きる心理療法と教育 臨床教育学の視座から 誠信書房, 1998
- 木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂, 2003.
- 木村敏: 自己・あいだ・時間 弘文堂, 1981
- 木村敏: あいだ 弘文堂思想選書, 1988
- 木村敏: 木村敏著作集8 形なきものの形をもとめて, 2001
- 小林隆司: 和太鼓演奏を種目とした機能訓練事業の効果. 作業療法, 22 (特別号), p423, 2003
- 小谷英文: 集団精神療法, 小此木啓吾・成瀬吾策・福島章 (編) 臨床心理学大系第7巻 心理療法1, 1990
- 甲谷至・斉藤由美子: 脳卒中患者のリハビリテーションとして行われた『和太鼓療法』の有効性について. 日本音楽療学会誌, 3 (1), 54-63, 2003
- 古浦一郎: 『心理学的考察「いきが合う」』 北大路書房, 1990
- Maslow, A.H.: *Motivation and Personality*, 2nd ed. Haper & Row., 1970 小口忠彦 (訳) 『人間の心理学 (改訂新版)』 産業能率大学出版部, 1987
- 松井紀和: 音楽療法の手引き 牧野出版, 1980
- 美原盤・藤本幹雄・美原淑子: パーキンソン病患者の歩行障害に対する音楽療法の効果—リズム・メロディの即時的効果, 三次元動作解析装置による検討—日本音楽療学会誌, 5 (1), 58-64, 2005
- 西尾雅明・井研治: 和太鼓の振動分析 電子情報通信学会技術研究報告, EA, 応用音響 99 (59), 39-46, 1999
- 岡田康伸: グループ箱庭療法の試み 京都大学教育学部紀要 37
- 岡田康伸: 箱庭療法の展開 誠信書房, 1993
- 大久保ゆうこ: 集団精神療法における『和太鼓』プログラムの効果. 日本芸術療法学会誌, 35 (1,2), 2004
- 齊藤孝: 息の人間学 世織書房, 2003
- 杉本素子: 作業療法概論 協同医書出版社, 2010
- 山口隆・増野肇他 (編): やさしい集団精神療法入門 星和書店, 1987
- 吉積明代: 中学生の集団凝集性と自己肯定感への音楽療法の効果—竹楽器と和太鼓を活用したリズム・アンサンブルを通して—, 九州大学心理学研究, 9, 193-203, 2008

Abstract

On the Experience of Performing Together the Japanese Drum

Yukana Kiyomoto

Drum performance is used as one of the group activities in many cases. However, group activity is broad and experience is different in a sport or group musical activities. Being characteristically sounding, Japanese drum is considered as a further different experience in group musical activities.

The purpose of this study is to consider the experience in Japanese drum performing together by using the Modified Grounded Theory Approach to analyze the interview conducted on professional drum players "KODO". The analysis suggests the existence of eleven concepts which are grouped into three categories, "experience of group activity", "experience which is going to unite a breath" and "experience which unites a breath."

In "experience of group activity", people have consciousness of themselves as collective members, and the others as a friends who are doing the same thing, and relation through a realistic act is experienced.

In "experience which is going to unite a breath", one has consciousness of oneself and the others as an individual with a feeling, and the place produced because individuals with a feeling gather was experienced.

In "experience which unites a breath", a sense of togetherness is felt from experience whose sound suits exceeding an intention. The feeling of the boundary of oneself and others became ambiguous, and, as for the feeling whose one is lost, and more than the thing that united every person's sound, the thing is experienced by experience of a sense of togetherness.

While experiencing the relations with others through "a group activity", one also experiences the relations through a different thing breath, in "experience which is going to unite a breath".

It can be said that one of the features of a drum performance that experience not only through relation through a realistic act but a breath is brought about.

This paper is to focus on each experience and experience of relation with the others who passed the breath especially, and also to inquire from now on.

Key words : Japanese drum , experience which unites a breath , narrative research